句集「こさぶえ」について

松岡満夫

一

「こさぶえ」は句、歌、文を集めたもので、明治三十四年十二月の刊行、著者は秋元洒汀である。句も歌も文も特にすぐれたものがないので、いつの間にか文学界から無視された。明治の新派俳人の個人句集としては最も早く出版されたものの一つで記念すべき著書とも考えられるが、今では全く忘れられてしまった。序文に「読もてゆけば、明治三十年以前、吾れの若かりし時の作にして、穉き格調、世に出さむは好ましからねど」とある、それはあながち謙譲の語でもなく事実であった。句に於ても歌乃至文章に於ても表現の稚拙さが目立つのである。作品は俳句が約二八〇、短歌が八首、半歌仙が一折、それに文章が少々という所である。量に於ては俳句が最も多いと言える。その俳句が、例えば同時代の日本派の俳句集「新俳句」（明治三十年三月）の中の俳句と比較して見て、何となく洗練されて居らず、俳句の壺を逸れているような気がする。

元日や瓶梅香裡屠蘇を酌む　　洒汀
壇の浦に初日を拝む涙哉　　〃
元日の新聞多き机かな　　把栗
初日さして橙赤き戸口かな　　〃

洒汀の元日の句は瓶梅香裡に意味と語調との優美な感を籠めようとした。初日の句は涙に懐古的感傷の甘さがあった。かく彼の句は感覚を露骨に表現しようとするので一句全体のうまさにかける所がある。把栗の句は何でもない所を句にしているのであるが、それぞれ十分に季感を表現していて、一句全体に俳句的まとまりがつけてある。

筍に木戸鎖れたる山家哉　　洒汀
筍や隣から来て二三寸　　里都
藪つゞき筍芽出す畠かな　　錦浦
茶畠に筍すっとのびにけり　　自然薯

洒汀の句は、筍が生えたために木戸が閉じられたという意が、筍を盗られないために木戸を閉じてある意か、恐らく前者の意であろうが、矢張

露骨に過ぎて嫌味が附き纏う。「新俳句」の俳人達の句は、平凡過ぎる程平凡である。それだけに、すっきりとして嫌味なく、この時代の俳句としての清新な感覚が横溢している。

酒汀の句を非難し過ぎると見られるかも知れないが、「こさぶえ」中の彼の句は以上の程度で、その最大の欠点は感情の表現があまりに露骨であるということである。どんな殺風景なものでも俳句になると考えていたかと思われるほどである。日本派の行き方を悪真似していたようにも見える。

むく〳〵と椽に這よる毛虫哉
蚊一つに遂によふ寝ずしまへけり
氷餅歯が痛いかと思ひけり
蚤一つ遂に飛れし恨かな
米洗ふ下女の手黒し杜若

悪い句ばかりあげては、折角の「こさぶえ」批評が批評にならないのであるが、さてよき句を見出そうとしても、それがなかなか見当らない。「こさぶえ」が文学史からも俳句史からも無視されてきたのは仕方のないことであった。

僅少の短歌を見ても決してよい成績とはいわれない。

波の色初日に赤き海原を鶴かと思ふ白き鳥飛ぶ
星ひとり西にきらめく黄昏に海原はるか魚躍る見ゆ

優美な景情を詠もうとしている心持はわかるが、その詠みぶりはまだ初歩の段階を脱していない。又、朝露と題する文の冒頭の

野分の吹荒ひたる朝ほらけ、澄に澄た空は高く、満目荒涼たる露の野を、行くとしもなく行ば、永劫の夢の人を、埋めたる墓場の陰、無名草のひよろ〳〵として、やもめの蝶の白く小さきが、花にすがりて飛も得ぬなぞ。

の如き、文章としても稚拙の域を脱していまい。

こういう風に見るべき作品のすくない著作を、ここにわざわざ取上げて見たのには別に理由がある。それはこの著作が時代の匂いを多分に持っているということである。どんな著作でも時代の産物である以上、その時代のある面を匂わせている。従ってそれらの中には手に取った時、内容のつまらないために失望を感じながらも、簡単には捨て去れない魅力を持つものがある。そういう著作を私は下手物と呼んでいる。「こさぶえ」は今の私にとって、そういう下手物の一つである。

二

「こさぶえ」は明治時代によく見る袖珍型の瀟洒な装釘の書であった。私の見たものは、上野図書館蔵の修理した書であったので、或は原型を誤っているかも知れないが、大体において、四六判型よりも小型であると見た。発行所は神田佐久間町四丁目、白鳩社である。白鳩社は、これよりも前三十四年七月に服部躬治の歌集「迦具土」を出版した。この方は歌集としてよく知られている書で、その序[註一]によると、白鳩社は「肝合へる文学家、美術家の小団体」によって作られた出版社であったということである。「こさぶえ」の附録には、次の如き白鳩社の出版広告がある。

太田みつほのや作

詩集　露草

こは作者が野に吹きすさみたる草笛の其節うつし留めて仮りに斯くは名づけたるものなり、旧き歌は慰め与ふるに足らず、新しきものも聞くにふさはしからぬ、此頃の試みに耳貸して此集のもたらし来るものを聞き給へ。

服部躬治作　　定価　金四拾銭
詩集　迦具土　　郵税　金　四銭

詩二百九十九首、画十二葉、共に会心の作を請ひ得て「かぐつち」成る、新に芸苑に添ゆる花、願くは摘まれて長しへに匂ふを得ん乎

「迦具土」は既刊で、「露草」は近刊の予告であった、実際は「露草」は白鳩社から出版せられないで、[註二]明治三十五年二月、文友館から「つゆ草」として発行された。どういう事情でかくなったのか、今私は知ることが出来ない。それはともかく、この広告文では明かに二書ともに詩集と銘してある。従って「こさぶえ」もこの二書の中間に位するのであるし、出版者としては矢張同様に詩集と銘して差支えない考えであったと思う。ただし白鳩社発行の「独絃哀歌」（蒲原有明、明治三十六年五月）の附録の図書要目では、はっきり「句集胡沙笛」としてある。量において俳句が多いのであるから、これは当然であるが、出版者や作者の気持では、俳句界の俳句集とするつもりのものではなかったと思う。図書要目中の「こさぶえ」の広告文を見よう。

謙譲なる作者の為には書肆は何事をも声言せずと云ひたる「胡沙笛」は却りて読詩界批判の声に反響せられて発兌後期日を出でざるに早くも第一版を售り尽して了りぬ。今や洒汀子一家の風調は更に書肆が苦心の装に飾られて再版市に上るに至る。幸に詩壇の花をして栄あらせ給へ

ここに読詩界とか詩壇の花とかある言葉によって、「こさぶえ」が一つの詩集と考えられていたことを知る。この広告文は再版を告げているが、同じ図書要目中の「迦具土」の広告文は再刊について述べていない。「迦具土」よりも「こさぶえ」の方が、詩壇に歓迎されたのであろうか、いささか不思議に感ぜられる。ともあれ「こさぶえ」は詩の集であったのだ。そう考えて「こさぶえ」をよみ直すと、そこにありありと明治の詩の世界があるように感ぜられる。笛の音色は明治の詩人の愛する感傷であった。洒汀も明治的感傷を以て、自分の詩集に「胡沙笛」と題した。そのことは自序に明らかである。

水にさうて春の月夜を謡ひ行
春雨の窓に歌集を写す哉
春雨や海老茶袴のぬれて行く
城破れて唯夏草の茫々たり
晩鴉点々僧一人行く花野哉
夕紅葉牧童の笛聞ゆめる

これらの句の良否は問うまい。作者が気障の感じを抱かせるほどにあらわに詩的情緒を詠い出した点に注目して欲しい。「こさぶえ」の中には所々に挿画がある。少女の順礼の図とか、琵琶法師の図とか、それらがすべて、青年男女の感傷好きに相応しい図である。それらの図と相俟って俳句、短歌、文章の感傷的美感が強められているのである。その心でこの著書を繙く時はまことに気持のよい書である。内容の価値を問わな

いで、明治の詩的感傷に浸るには恰好の著書であった。挿画の筆者は当時の挿画家として名高い、一条成美、山中古洞、寺崎広業ら三人である。「こさぶえ」を正しく批評するには、その書全体の作り出す気分を正しく認識する必要がある。そういう意味で此の書も記念とすべき書であった。ただ返えすがえすも遺憾なことは作品の価値に乏しい点である。何故にこういう結果になったか、勿論洒汀その人の力量の不足に由ることではあるが、もっと他に理由があるかも知れない。

三

明治の三十年代は、韻文の時代、詩の時代である。新体詩、短歌、俳句合わせて詩と呼ぶ時代である。特に新体詩と短歌との結合は密であった。歌人達は短歌を新しい詩と考えた。明治三十九年五月、新詩会から「新詩辞典」という書が出版せられた。新詩とは短歌のことで、この書は短歌用語と作例とを集めたものである。しかしまた、新体詩用語の参考にもなるように編集された。序文を寄せた人々の中には、金子薫園、河井酔茗、薄田泣菫、土井晩翠、尾上柴舟等の詩人、歌人がある。附録の歌論を寄せた人に、窪田うつぼ、佐々木信綱、伊藤左千夫がある。「新詩辞典」以前にも類書が出版されている。例えば、西村酔夢の「作文良材美辞宝典、正編、続編」（明治三十五年二月、文武堂版）がある。これは美文、韻文の両方に応用出来るように編集した類語辞典である。美文家、新体詩人、歌人のための参考書であった。

さてここで注意したいことは、これら二書とも俳人の参考になるような編集がされていないということである。俳句も詩であり、俳人も詩人である。従って詩人のための用語辞典に俳句関係のものを入れてよい筈であるが、それは何となく敬遠されている。新詩という熟語からも俳句はせり出されている。同じく詩でありながら、俳句がひとり、よそよそしく取扱われるのは、恐らく俳句の性格がしからしめるからであろう。左千夫は「多くの場合に於て、俳句は作るもので、歌は詠むものである。故に俳句は手の先で作れることがあるが、歌は決してさうでない」（「新詩辞典付録」、歌譚数則）と言った。俳句が手の先で作られるというのは少し言い過ぎである。俳句の直感的な性格を誤解していたのではないかと思う。それに対して歌が詠嘆的であると言っているのである。歌が詠嘆的であるということは、歌が感情的であるということに言いかえられる。それはともすれば感傷的になり易い。俳句が直感的であるということは、俳句が観相的であるということである。それは物の本質に単刀直入するが故に警句となり易い。窪田うつぼは詩形の長短に基いてその差別を考えようとしたが、それも考えられる所である（付録、感興に就いて）。とにかく、左千夫もうつぼも俳句と短歌とをはっきり区別すべきことを説いた。二人とも二つの部門が相容れないものであることを考えていたのだ。これは二人とも歌人であり歌人の側から俳句を考えていたためである。俳人の側から、短歌を考えると、その余りに詠嘆的、余りに感傷的に流れることにあきたらないことがある。正岡子規が写生の立場を以て、真向から短歌を切り、新しい短歌の世界を打ち開いたのは、俳句の特性を短歌に応用してそれを更生させたことであった。名高い藤の花房の歌は写生的であるというより、観相的であるというが正しい。子規の方法によれば俳句も短歌と結合することが出来る。彼はそれを見事に果した。

新体詩は短歌と同じく詠嘆的である。新体詩の詠嘆的、抒情的なものを、そのまま俳句に持込もうとしても、恐らく俳句はそれをはじき出すであろう。しかるにこれも俳句の側から新体詩に入って行けば二つは化合し得ると思う。子規に新体詩の数篇があるが、いずれも俳句的感興の新体詩化であり、所謂新体詩人の新体詩とはまた別種の味わいを見せている。子規は新体詩においては短歌ほど成功しなかったが、既に蕪村がそれを試みて成功した例があり、彼の「晋我追悼曲」「春風馬堤曲」は近代詩の祖とまで言われている。二曲とも蕪村の俳諧的感興が自ら作り上げたものである。

洒汀は俳句の中に短歌的、或は新体詩的感覚を持込もうとした。彼の俳句がともすれば露骨な表現に堕したのもそのためであった。

梅が香やこの曙を唯一人

山寺寂として彼岸桜散る

山長く青田万頃月すゞし

鶉啼く小野の夕暮人見えず

凩の夜は吹落て鐘淋し

これらは、俳句というより詩の中の一句のような感じがする。俳句的発想によって生れたものではなく、短歌的、新体詩的発想によって作られている。洒汀の短歌の

雪ちら〳〵黒衣の僧都鉈提て柴を尋に仁和寺を出づ、

明星の淡く残れる野は広く霜白うして蕎麦の茎赤し

の如き、その上の句を独立させれば、彼の俳句となる。即ち

雪ちら〳〵黒衣の僧都鉈提て

明星の淡く残れる野は白し

という具合で、これを彼の句集中に入れてもそれほど不釣合には感ぜられまい。要するに彼の句には短歌的な流麗な何となく感傷的ひゞきを感ぜしめるものがある。

四

忍び男の踏みし跡あり蕗の薹　　洒汀

蝙蝠や江口の君の乳黒し　　〃

「こさぶえ」の洒汀句集の中、恋の句はきわめて少ない。詩的感傷を愛したであろうと思われる彼としては、これは不思議である。序によると、明治三十年以前のものを集め、それ以後の作は「濡れ鷺」の中に編みいれる予定となっているが、しかし、三十四年の俳誌「俳声」（二月創刊）に見える句が、そのまま「こさぶえ」に採られているので、序文の言葉は正確でない。恐らくその大体を言っているものと思われる。「こさぶえ」巻頭の独吟半歌仙も「俳声」二号に見える。「こさぶえ」発行の三十四年頃の洒汀の俳句観は、この「俳声」の中にいくらか見出せる。まず、一号所載の「俳諧新詩料」で、明治の新俳句は、当代の風俗資料を後代に残すべく、なるべく多く新風俗をよみ込むべきであるといった。すでに述べた通りの明治的抒情をねらった彼の意見としては古めかしいことであった。四号所載の「俳人としての井原西鶴」では新俳人は西鶴の句風を学べとのべている。談林調ははやく尾崎紅葉がとりあげており、新俳壇になってからも、蕉風、蕪村風と移っている事実を無視して再び西鶴へ帰えれというのであった。明治の新詩風をとり入れようとした彼

の意見としてはその古典的すぎるのに驚くのである。彼は三十三年四月、大阪を訪れて誓願寺の「仙皓西鶴」の墓誌銘を拝して

陽炎やゆるぐかと見し塚の石

と詠んだ。談林調を軽く見ていた当時の俳壇に反省をうながすつもりであったのであろう。もしそうであれば、明星派の短歌の如く、思い切って痛快に恋愛俳句を詠んで見たらどうであったか、かって蓼太[註三]が連句に試みたように。俳句（発句）の性格が、そういう放埒を拒否するためか、彼もつつましやかに、また他の俳人もそれを試みなかった。

洒汀には「小野小町」という著書がある。「独絃哀歌」の附録広告文によって知り得たのであるが、まだ見ていない。内容はわからないがこ治いう恋愛歌人を論ずる彼が恋愛に無関心であるわけがない。恋愛は明うの詩人が好んでとりあげた材料である。俳句に十分に恋をよみ得なかった洒汀は、小野小町論にその思いを晴らしたつもりであったのであろうか。かの「迦具土」の著者、服部躬治には「恋愛詩評釈」（明治三十三年十一月、明治書院）という著書がある。万葉集以来の恋歌を評釈したものであるが所謂、世の中の国文学註釈書というものではない。時代の恋愛讃美の風潮が著者を駆ってかかる書を成さしめたものと見たい。著者の精神を知るために繁をいとわず、その序の後半を次に掲げる。

まづ、人ありて、まづ詩を成すや、必ず、まづ、情を抒べむとせむ。情は広し。必ず、まづ、愛を歌はむ。愛に類あり。必ず、まづ、恋に創めむ。両性間の恋に創めて、而る後父子に及び、兄弟に及び、社会に及ばむ。両性間の恋愛は、聖の、最も聖なるもの。その人の生くる、その詩の生くる、はたまた、固より、その数なり。生きたるその詩、味ひ見むは、いかにいかに、楽しからずや。ために、この書を作りぬ。

さばれ、わが詩は、わが詩たるべし。いづこまでも、わが詩たるべし。詩の存在は、自己に伴ふ。詩は、自己を離れず。離るべきは、詩にあらざるなり。抒情詩、殊に然り。恋愛詩、殊に殊に然り。他人の詩を読む、そは、自己の発展に、力を加へむがためのみ。自己の発展をさしおきて、他人の詩情に倚るべからず。たゞそれ、始に反らむぞよき。美は無垢なり。情は聖し。

文章も美文的であり、内容も恋愛を謳歌する精神を強くしらべている。洒汀と躬治とは何の関係もなかったと思う。今の私は、白鳩社という出版社を通して、二人の共通の地盤を知るだけであるが、「小野小町」を著した心も「恋愛詩評釈」を著した心と恐らく相通うていたことであろう。洒汀も時代の子であり、「俳声」の創刊を祝した句は

紅梅の朱唇美し春の風

であった。この時の祝句は永機の句をはじめ二十六句あるが、その中で最もなまめかしきは洒汀の句であった。

寒垢離の密に恋を呪ふらし

数少い彼の恋句の中でも、又全体の句の中でもこの句は心をひく句である。明治的な匂いのする句である。「美辞宝典」には人事に関する語群の項目に「憤怒」があり、「新詩辞典」では、更にそれに「呪咀」が加えてあった。世の怒り、恋の呪いは当代の歌人、詩人の愛する感情である。

五

「こさぶえ」に「悲哀」と題する一文がある。洒汀は短篇小説のつもりで書いたのであろうが、その内容は盲目の娘が按摩をしながら母を養っているという、ただそれだけで、つまらない人情物語である。小説界に流行した悲惨小説を模倣したものであろう。

洒汀は俳句に於ては、短歌、新体詩界の流行を受入れて見ようとした。思うに彼は一人の文学愛好家で、俳句を愛し、短歌、新体詩を愛し、小説を愛しという風に、当時の流行文学のどれも捨てがたいという程度の文学人であったようだ。彼の文学に関する意見らしいものが、殆ど見当らないので、何とも批評のしようはないが、恐らく文学に関して定見は持っていなかったであろう。著作の序文にはよく著者の意見が書かれるものであるが「こさぶえ」の序では全くそれがない。

洒汀ははじめ千葉県流山に居住し、後土浦に移ったという。俳系は秋声会に属するものと考えられる。雑誌「俳声」の同人で、作品もこれにいくらかのせられている。雑誌「卯杖」（明治三十六年一月創刊）にも名はつらねていたが、作品を発表していない。秋声会でもそれほど重んじられなかったようだ。「こさぶえ」の成績から見て当然であろう。秋声会の最初の雑誌は「秋の声」（明治二十九年一月）である。その中にも、私の見た七号までには洒汀の俳名は見出せない。秋声会の最初の句集「俳諧木太刀」（明治三十一年八月）にも彼の俳名はない。これでもって見ても、彼の秋声会における位置はわかるだろう。秋声会の第二句集「俳諧新調」（明治三十六年九月）にものっておらぬ。第三句集「新俳句帳」には勿論入っていない。秋声会から全く無視されていたようだ。その彼が、書の外見だけは進歩的に見える「こさぶえ」を公刊したのだから面白い。彼の意志でなく出版屋の企画によったにしても、新しみをねらったことは確かである。「こさぶえ」の下手物たる所以である。「俳諧木太刀」[註四]の挿画は日本画的な如何にも保守的なものだった。日本派の第一句集「新俳句」[註五]は表紙絵は菫の花をあしらって一寸新味があるが、挿画は俳画的で一種の風格は持つが矢張保守的の一面を示している。それに反し「こさぶえ」の挿画は浪漫的な味の強いもので、中には当時の新体詩書によく見るキューピッドの絵もある。

岡野知十の句集「鶯日」（乾）に

洒汀子の胡沙笛に題す

老樹梅のその前に共笛吹く勿れ

とある。私の筆写した上野図書館蔵の書にはこの題句はなかった。再刊に際して与えたものか。句の意味は、「こさぶえ」の浪漫的な若々しい精神を考えて、汝のその笛は老樹の梅花の前で吹くものではないと言ったのであろう。知十の心は俳句に対する洒汀の態度を戒めたものか、はたまた、その若々しい精神を貫けと言ったものか、これだけではどうもはっきりしない。知十みずからも、これよりすこし後れて、西洋臭味のハンカチーフ俳句を作ったりしている。それも流行調で成功はしなかった。とにかく老樹梅は伝統俳句を、笛は現代を象徴しているのかと思う。「こさぶえ」の扉絵の広業画くものは梅花の下で海老茶袴の少女が読書している所であった。知十の題句はこの絵に題したと見てもよい。

洒汀はこの知十と親しく交ったらしい。「こさぶえ」巻頭の独吟半歌

仙には知十が批評を加えた。それが「俳声」四号にのせられている。洒汀が知十の承諾を得て「俳声」編集部に送ったのである。同じ号にある知十の「月庵記抄」を見ると、明治三十四年一月二十九日、晴、根岸此花園の川喜多虚白主催の俳筵に洒汀は列席している。その時の彼の句は

　　獺まつりありしか残る魚の骨

で、これは「こさぶえ」に入れてある。なおこの記には知十が流山の洒汀宅を訪れて利根の鯉の手作りを振舞われた思い出が書いてある。秋声会同人であった森無黄の「無黄論集」第二巻の無黄年譜によると「明治三十一年七月、下総流山ニ秋声会諸氏ト秋元洒汀君ヲ訪フ」と見え、知十の思い出話もこの時のことであったのだろう。秋声会同人とかく交際したと見られる彼の俳句が同人句集に採られなかった理由をどう解してよいか、今の私にはよくわからない。作品にすぐれたものがなかったからであるとだけはいえる。

「こさぶえ」という下手物俳書について述べて見た。秋元洒汀の生歿もわからず、まずその不明な点から明かにすべきであったが、それも出来ないで、こんな頭も尾もないものになった。下手物著作は多い。俳書に限らず、短歌、新体詩、小説の方面にも随分ある。こころみに、新声社や文学同志会の出版目録や博文館はじめ、出版社の目録を見るがよい。今日もはや忘れられてしまったものが如何に多いことか。しかし最近の研究では各部門にわたって詳細な年表が作られ、巨細もらさないようになって来た。ただ「こさぶえ」だけはそれら年表にものせられることがなかったのではないかと思う。つまらない書であったが、これも人間の営みであり、日本派隆盛の時代の中にあって、ともかく一冊の異色俳書を作ったことに興を覚えて、強いて筆をつけて見た。

（一九五九、八、一五）

註一　現代短歌大系第二巻による。
註二　現代短歌系第三巻による。
註三　恋の百韻百羽がき（天明三年）
註四　本学学術報告、人文、第2号「新派俳家句集と俳諧木太刀」参考。
註五　「国語と国文学」（昭和二十九年八月号）「新俳句」の成立と特色参考。